

昭和41年8月5日 第3種郵便物認可 2003年2月1日 毎月1回1日発行 第66巻第2号 通巻661号 ISSN 0910-4489



野鳥

2

WILD BIRDS NO.661 2003

財団法人 日本野鳥の会

[特集] カンムリウミスズメのくらしと危機





トラツグミ(写真/佐藤元一)

特集 **カンムリウミスズメのくらしと危機**

- 04 知ることから守ることへ
—カンムリウミスズメに惹かれて 文=小野宏治
- 10 カンムリウミスズメを守るために
—本会・支部・会員の取り組み
- 13 夢はエトピリカのコロニー復活 文=片岡義廣
- 15 日本の海鳥の現状とコロニーデータベース (写真/小野宏治)
- 16 「日米海鳥シンポジウム・ワークショップイン羽幌」参加報告
- 18 ひなこのお散歩鳥講座 ⑤ 「地鳴きのさまざま」
エッセイ
- 27 トキがたくさんいた時代 文=石川英輔
パートギャラリー
- 28 韓国のカモ柱 写真=大河原恭祐
- 47 考えよう! 広めよう! フィールドマナー ②⑤
- 49 東京湾鳥類誌 ⑩ 版画・文=長島 充
- 50 とっておきの一枚
- 53 野鳥スケッチ図鑑 ⑬ イラスト・文=本山賢司
- 30 小特集 かごの野鳥の解放をめざして 文=遠藤公男
- 39 法人特別会員のご紹介 ②
- 20 ブックス
- 22 イベント
- 25 支部の探鳥会
- 34 活動
- 41 会員フォーラム
- 52 執筆者紹介

野鳥 ②

February 2003
No.661



(写真/小野宏治)



表紙画:
「カンムリウミスズメの春」
申井てつお
(水彩、色鉛筆、CG)

無事巣立ちを終え、はじめての海にもすっかり慣れて余裕のヒナ—。これから先、どんな出来事が待っているだろう。がんばれ、カンムリウミスズメ。

カンムリウミスズメの くらしと危機

黒潮に沿って分布するカンムリウミスズメ。一般には目にする機会が少ないかもしれませんが、地域によっては「孫太郎」「テンチク」などと呼ばれ親しまれてきました。分布域がほぼ日本周辺に限られたこの海鳥が、いま絶滅の危機に瀕しています。カンムリウミスズメの姿を通して、日本の海鳥全体が直面している状況を考えてみたいと思います。

海上のカンムリウミスズメ。春になると黒潮の流れる海域に現れる。2月下旬には彼らの声で批柳島はにぎやかになるが、環境省の編集した日本版レッドリスト(日本の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)では絶滅危惧Ⅱ類とされている(写真/小野宏治)



批柳島は宮崎県門川町の沖合にある。写真は北側から見た批柳島(写真/小野)

知ることから守ることへ

—カンムリウミスズメに惹かれて

文 小野宏治

カンムリウミスズメの世界最大の繁殖地は宮崎県批柳島びりゅうじまにあります。地元の門川町立門川小学校では、子どもたちが海鳥研究者の小野宏治さんと交流しながらカンムリウミスズメについて学び、そのくらしと危機を伝える絵本を作りました。この絵物語と子どもたちの取り組みを、小野さんと門川小学校の田ノ上久美子先生に紹介していただきました。

はじめに

東京の下町で生まれ育った僕にとって、海鳥はもつとも縁がない生きものだったに違いない。都心にくらすズメに興味を抱いて進んだ大学、そして大学院から、ひよんなことで分類もまったく違うカンムリウミスズメの生態研究へと転身し、気づいたら海鳥の魅力にどっぷりとはまっていた。この島に差し迫った危機を肌身に感じたときから、知ることと守ること、そして感じることをいかに結びつけていけばいいのか、これまでずっと考えながら仕事をしてきた。

生態と繁殖地

カンムリウミスズメは日本近海だけにすむ全長24cmあまりの海鳥だ。大きさのわりには体がぶっくりとしていて、これはウミスズメ類に共通した特徴でもある。そういえば、研究者は対

カンムリウミスズメの他に日本で繁殖するウミスズメ類



ウミスズメ。北海道天売島で繁殖し、冬期は全国の海上で見られる。全長25.5cm、日本版レッドリストの絶滅危惧ⅠA類 (写真/石田光史)



ウミガラス。北海道天売島で繁殖し、周辺の海上で見られるが、その数は激減している。全長42cm、日本版レッドリストの絶滅危惧ⅠA類(写真/寺沢孝毅)



ウトウ。北海道天売島など北日本の島で繁殖し、冬には少し南下した海上でも見られる。全長37.5cm(写真/寺沢 右も)



ケイマフリ。北海道や青森の離島で繁殖する。冬は北日本の海上で見られる。全長37cm、日本版レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類



エトビリカ。北海道東部のユルリ・モユルリ島や霧多布で少数が繁殖している。全長37.5cm、日本版レッドリストの絶滅危惧ⅠA類(写真/片岡義廣)



マダラウミスズメ。北海道で少数が繁殖とされ、冬は本州以南の海上にも見られる。全長24.5cm、日本版レッドリストではDD(情報不足)とされている(写真/渡辺潤一)

象とする生物に似ると言うけれど、ご多分にもれずウミスズメ型の自分がかうれしくもあり悲しくもある。灰色の背中に白いおなか、頭にはちよこつとかんむり(冠羽)とよばれる3〜6cmくらいの羽をのせ、たかむいらしい鳥で、船が近づくと「チュイチユイ」とか「ピチュピチュ」と鳴きながら冠羽を立て

て警戒し、すぐにもぐって姿を消してしまう。繁殖地の北限は石川県七ツ島、南限は伊豆諸島鳥島で、黒潮とその分流である対馬海流が流れる暖かい海域が彼らの生息域である。日本以外には韓国の南部で繁殖が知られているものの、現状はわかっていない。

◀日本で見られるウミスズメ類は14種、うち7種が繁殖している。このほか繁殖は見られないものの、日本で観察されているウミスズメ類にハシブトウミガラス、ウミバト、ウミオウム、コウミスズメ、シラヒゲウミスズメ、エトロフウミスズメ、ツノメドリがいる

カンムリウミスズメ絵物語



3

あおいそら、あおいうみ。カンムリウミスズメのふるさと、宮崎県門川町の沖にある枇榔島という無人島です。「ああ、なんて空気がおいしいんだろう」「長い長い旅を続けて、ようやく門川の海に戻ってきました。」



1

▲カンムリウミスズメは夫婦になると、「一生あいてをかえる」とはありませぬ。「鳥をめざして飛んでいこうよ」夜のランデブー飛行は、一晩じゅう続きました。



4

巣は岩の下や岩のわれめ、石垣、草のあいだなどにつくります。去年もつかった巣穴のぐあいを何度もたしかめたあと、カンムリウミスズメの夫婦は今年もここに巣をかまえることにしました。



2

今日は満月。月明かりに枇榔島がくっきりと浮かびあがります。枇榔島はおよそ400メートル四方の小さな島ですが、ここはカンムリウミスズメにとって世界最大の繁殖地なのです。



カンムリウミスズメの捕食された痕(羽の殺や死体)を調べて
枇榔島の崖を歩く(写真/小野)



枇榔島調査の日々

大学院の6年間、僕は伊豆諸島八丈小島の小池根と宮崎県東臼杵郡門川町の枇榔島を主なフィールドに繁殖期の間、島に住み着いて観察を続けた。無人島での調査は、半分以上が生活することに労力をとられる。夜に繁殖地に戻ってくる彼らを一晩中観察し、昼は40度近くになるテントをベースに巣ごとの抱卵状況をチェックしたり、捕食痕を探し歩く。料理はもちろん自炊で、毎日同じものでは飽きるから創作してこしらえる。枇榔島にはオオミズ



日没後、ヒナは親に誘導されて海へと向かう(写真/小野)

▶岩を乗り越えようと一生懸命に登るヒナ。生まれてすぐに泳げるように足は成鳥の9割近くの大きさがある(写真/小野)



◀崖から海に向かって飛び降りるヒナ。おそらく海に出てから初めて親に餌をもらうのだと考えられる(写真/小野)

見えてきた危機

観察を続けながら、枇榔島では繁殖期に最大でおよそ三千羽が周囲の海上で見られることや、繁殖地でどんな生活を送っているのがわかってきた。生態や現状が見えてくると、枇榔島で

ナギドリも繁殖していて、海鳥たちと日々を分かち合いながら、少しだけ彼らの表情や気持ちが見えてきた気がした。カンムリウミスズメのヒナは、生まれてわずか1〜2日で親とともに海へと出てしまう。そして繁殖年齢に達するまでふたたび繁殖地に戻ることはない。小さな体で懸命に海へと向かい波間に飛び込む姿は、鮮明に頭のなかに残っている。

子どもたちとの分かち合い

研究のゴールは、「分かち合う」となのだと思う。論文を書くのもひとつのゴールだと思うけれど、僕はカンムリウミスズメという鳥そのものが持つすばらしさをもっと多くの人と分かち合いたいと思っている。だから、宮崎県門川町立門川小学校の田ノ上先生から連絡をいただいたときには一も二もなく飛びついた。先生からのメールはこんな書き出しで始まっている。

の推定を含めて総個体数は一万羽にも満たないだろうことや、カラスやネズミの捕食、油汚染、釣り人等の上陸による海鳥への影響といったさまざまな危機も同時に浮かびあがってきた。

7

※[野鳥]誌では、本来子育て中の写真は掲載していませんが、本特集ではカンムリウミスズメの生態と取り組みの経過をご紹介するために、小野宏治さんが繁殖への影響に注意を払って調査時に撮影したものをお借りしました。

「はじめまして 門川小学校4年1組担任の田ノ上久美子です。今年4月に赴任しました。そこでカムリウミスズメのことを知り、とても興味を持ちました。子どもたちにカムリウミスズメのことを聞くと何も知りません。これではいけないと思い、2002年の総合的な学習導入に向けて、環境教育の一環として、門川小学校の4年生94名の子どもたちと一緒に、カムリウミスズメのことを学習していくことにしました。」

メールやビデオレター、写真などをやりとりしながら、子どもたちとの交流を楽しんだ。カムリウミスズメという鳥を知らない人たちに、いくら守ろうと叫んでみても振り向きさえしてくれない。まして、地元でさえ知らない状態ではなにも始まらない。子どもたちはやがて大きくなって、地域を担っていくだろう。そのとき、少しでも心に残るものをお願いながら取り組んだ「カムリウミスズメ絵物語」の子どもたちの絵は、僕にとってこれまでで一番の宝物となった。

あなたも海鳥を守る！

第二弾、というわけではないけれど、僕らはいま、先生をはじめさまざまな人たちと共同で「海鳥を学ぼう」という教育カリキュラムを作っている

ところだ。ボランティアの人たちを中心に米国政府が製作したものをまず翻訳し、日本の多くの学校で採用してもらえるようにアレンジを続けている。まだまだ多くの人のアイデアと協力が必要で、紙とペンと、ちょっとした考えさえあれば、あなたも海鳥を「守る」ことができるのだ。この記事を読んで関心をお持ちの方はぜひご連絡してください！(連絡先はプロフィール)

日本の海鳥の現状は、いまでも厳しい。環境省のレッドデータブックを見ると、日本で繁殖する海鳥の6割弱が、すでに記されている。海鳥を守ることは豊かな海そのものを守ること、これからも恩恵をうけられるようにすることなのである。それに、海鳥がいられない海なんて、私たちにはとても耐えられない。

(おのこうじ)



小野宏治
おの・こうじ

1968年、東京生まれ。1997年4月、環境省と羽幌町で共同運営する日本初の海鳥研究・普及啓発施設、北海道海鳥センター (<http://www.seabird.go.jp/>) に研究員として勤め、現在に至る。パシフィック・シーバード・グループ日本海鳥保護委員会共同委員長。連絡先E-mail:ono@seabird.go.jp



13
親子は一晩じゅう泳ぎつづけた。朝日がのぼり、ふりかえると根柢島が海の向こうに浮かんでいました。「ほくたち、こんなに泳いできたんだね」



15
「さあ、今度はほうやたちのぼんだ。失敗をおそれず、もぐつてこらんひなたちは順にもぐります。目をつぶって、息をとめて、えい、やっ！」
水の中でおそれる目を閉くと、只や海そう、お魚など、いままで見たこともないたくさんのいきものが見えてきました。遠くにはイルカも泳いでいます。「へえっ、なんてきれいなんだらう」



14
「えっへん、今日はもぐる練習をします」お父さんが胸をはって言いました。「では、見本を」さぶーんっ…。「げほげほっ」まちがって海水を飲んでしまった、げほげほっお父さんは苦しそうです。「あらあら、お父さんも失敗することがあるのね」お母さんがお父さんの背中をさすって、ほほえみます。



16
海がこわくなると、ひなたちはごほんとなる小魚をとる練習をしました。「だれがあつ青い魚をとれるか、競争しよう」だれともなく言いだすと、どちらともなくもぐります。翼が短いのでお父さん、お母さんのようにはもくれませんが、浮いてはもぐり、もぐつては浮きながら、ひなたちは少しずつ泳ぎがうまくなっていきました。

17



「何か近づいて来ますよ」船の下をくぐるよ」スクリーンに巻き込まれないように気をつけてるんだよ」こうしてひなたちはちよつと危険なことも覚えていきます。

18



お父さんのお父さん、つまりおじいちゃんが昔話をしてくれました。おじいちゃんはいろいろなことを知っている。カムリウミスズメの先生です。「むかし、むかし…」おじいちゃんは、長い冠羽(頭に生えている羽)を風になびかせながら、語りはじめます。

20



「海には食べていけないものがたくさんある。ああ、むかしはとってもしきれいな海だったのに、人間はどこまで海を汚すんじゃろか」プラスチックは分解されないまま、世界の海をまわり続けます。顔とまちがえて飲みこんで、死んでしまう海のいさみの仲間も多いそうです。「人間だって、海からたくさんの恵みをうけているのにね」だれかが言いました。

21



海にくらすカムリウミスズメ、海とともに生きるカムリウミスズメ。海は、わたしたち人間にとっても、たいせつなふるさとです。わたしたちの海がいつまでも豊かな海でありますように。わたしたちの海がいつまでもカムリウミスズメがくらすように。

©Koji Ono&Kadogawa Primary School.
All rights reserved.

「カムリウミスズメ絵物語」 づくりから 子どもたちが得たもの

文 田ノ上久美子

1998年4月、何も知らない子どもたちに、門川町の枇榔島を世界一の繁殖地とし、絶滅の危機に瀕している天然記念物の海鳥「カムリウミスズメ」のことを伝えると、子どもたちは「もっと知りたい。守りたい」という思いをもつようになり、北海道海鳥センターの小野宏治さんを「カムリウミスズメ博士」と慕いながら、環境学習を進めていきました。子どもたちは、門川町の枇榔島は「世界一の枇榔島」と語る小野さんの言葉に奮起し、自然を大切にしようという思いがますます高まってきました注1。この「カムリウミスズメ絵物語」は、94名の子どもたちによる1年間の環境

学習の集大成です。現在、この絵物語を読んでカムリウミスズメに関心をもち、環境学習に取り組んでいる後輩たちがいます。この取り組みが当時4年生だった子どもたちだけに深く印象づけられ(注2)、今も生きていくことに驚きと喜びを感じつつ、責任も感じている(たのうえくみこ)。

(たのうえくみこ)

(注1) 浜辺にはカムリウミスズメの天敵といわれているカラスがたくさん集まります。浜辺のゴミをひとつ残らず拾い集めたら、カラスも来なくなり、カムリウミスズメが来るかもしれないという期待をもつてゴミ拾い活動にも取り組みました。子どもたちの活動を保護者や上級生も手伝ってくれました。(注2) カムリウミスズメを観察するために来日したイギリスの方の訪問もありました。小野さんのホームページを通じて、門川小に連絡があり、思いがけない交流ができました。子どもたちが門川町の枇榔島を「世界一の枇榔島」と実感した瞬間でした。



田ノ上久美子 たのうえくみこ

宮崎県門川町立門川小学校教諭
「私自身、カムリウミスズメについて何の予備知識もないまま子どもたちと一緒に環境学習に取り組みました。今の状況の中で、できることからひとつひとつ行動を起こしていくことが大事だということ子どもたちと一緒に学びました」



▶門川町の浜辺のゴミ調査。小野さんに調査方法を教えてもらい、自分たち町の浜辺のゴミ調査に挑戦した(写真提供/門川小学校)

9 ※門川小の取り組みは本会協賛の日米海鳥シンポジウム・ワークショップ(16頁参照)でも紹介されました。

野鳥 2003年2月号 No.661

カンムリウミスズメを 守るために 本会・支部・会員の取り組み

カンムリウミスズメは繁殖地が離島や沖合の岩礁などに限られており、その実態が広く一般には知られないまま、現在絶滅の危機に陥っています。彼らを救おうと、本会・支部・会員など、それぞれの立場から各地で調査や保護活動が行われています。調査の機会が天候に左右されやすく、船の借り入れなどにも苦勞を伴う中、人々の熱意で進められている取り組みをご紹介します。



カンムリウミスズメの繁殖地「大野原島」。向かって右側の岩礁が「子安根」(写真/山本裕、1994年5月23日撮影)。

繁殖期の洋上分布を探る 三宅島周辺でのカンムリウミスズメ調査

文 山本裕

春を告げる鳥「チンチク」

三宅島の漁師さん仲間の間では、カンムリウミスズメのことを「チンチク」と呼んでいる。三宅島の全島避難前、私がレンジャーとして勤務するアカコッコ館には、「1月下旬か2月初旬頃になると、「今日、チンチクを見たよー」と知人の漁師さんからの電話が入ったものである。漁師さんにとってカンムリウミスズメは、荒れた海が取り、春の訪れを告げる鳥である。

爆撃、ゴミ…人によるかく乱

この鳥の三宅島周辺での繁殖地は、島の西南西約10kmの洋上にある「大野

原島^{（はしじま）}」である。大野原島は、大小8つの岩礁からなり、中でも3つの岩礁は、遠くからでもよく目立つため、通称「三本岳」と呼ばれている。カンムリウミスズメは一番大きな「子安根^{（こやすね）}」（高さ114m）という岩礁でのみ繁殖している。

大野原島のカンムリウミスズメは、これまでかなり人によるかく乱を受けてきた歴史を持つ。戦後の食料難の時代には卵が採取され、1950年代初期の朝鮮戦争の時には、大野原島は米軍の爆撃演習地となった。貴重な海鳥の繁殖地が爆撃を受けていることに対して、当時のトルーマン大統領に爆撃中止を訴える手紙を書いたのが、軍務のために日本を訪れていた若き日のジャック・モイヤーさん（注）である。そのカンムリウミスズメとの関わりがきっかけで、その後モイヤーさんは三宅島に50年以上もすむこととなった。現在、大野原島は磯釣りのポイントとして知られる。全島避難中の今もわざわざ近くの島を経由して訪れる人があるという。週末に訪れる磯釣り客のまっ釣り餌や放置されたゴミ等によっ

図1 カンムリウミスズメの繁殖期の洋上分布



て、ハシブトガラスなどの捕食者が誘引されている。

調査は波しぶきを浴びながら

（財）日本野鳥の会では、1995年以降、毎年繁殖期の4～5月ごろに三宅島近海でのカンムリウミスズメの洋上分布調査を継続している。波が荒くて繁殖地に上陸する機会が限られているため、洋上分布の実態の把握から繁殖個体群の推移をモニタリングできないかということでのこの調査は始まった。漁船で移動しながら、鳥を見た場所、数、水温等を記録していく。その日の海況によっては若干の調査コースの変動はあるものの、2000年まで

はほぼ一定のコースで行った。避難中の現在も、近くの神津島や式根島から漁船をチャーターし、調査を続けている。

揺れる漁船の船先で、波間に浮かんでいるムクドリ大の大きさのカムリウミスズメを肉眼で探すのは、なかなか大変な作業である。鳥を見つけたら、方向や数を記録係に知らせる。波しぶきがかかるのはしよっちゅうのことで、時折、予期していない横波が来たり、向かい風になると、船体が上下に揺れ、つかまっていけないと海に投げ出されるような揺れもある、スリル満点の調査である。防寒対策をしつかりとして、船に乗り込むものの、長時間海上にしていると、次第に寒く、辛くなってくる。体調が悪いと船酔いするし、



調査光景。船先で鳥を探すジャック・モイヤーさん（写真奥）と本会職員（写真／小林豊、2002年5月8日撮影）

時には天候が変わり、大荒れの中を波しぶきでびしょ濡れになりながら港に帰ったこともある。

でも、洋上に浮かぶ、ちっちゃなカムリウミスズメの群れをみつけた時の感動は格別である。カツオドリやクロアシアホドリ、トウゾクカモメ、それにサメやマンボウなどとの思わぬ出会いも期待できる。これまでの調査から、大野原島の北側と三宅島の南西側にカムリウミスズメがよく見られる海域があることがわかってきた（図1）。この海域は、潮目温度や濃度の異なる潮流がぶつかって起きる帯状の場所が生じやすい場所である。

海鳥の実態把握を目ざして

海鳥の個体群へ影響を及ぼす要因としては、油や化学物質による汚染、混獲、捕食者・人による繁殖地のかく乱、繁殖地の環境、餌資源の問題など多岐にわたっている。こうしたさまざまな事象に対して、海鳥の生態や分布の実態に関する情報は、一部の種を除いてはまだ十分とは言えないのが現状である。伊豆諸島の三宅島という地域での局所的な事例であるが、繁殖期のカムリウミスズメがどのように洋上に分布しているのかのデータが得られつつある。

（やまもと・ゆたか／本会サンクチュアリ室）

支部・会員による調査・保護活動

伊豆諸島最大の繁殖地で

沼津支部の原徹さんは1998年から神津島属島の砥苗島でカムリウミスズメの標識調査を行っている。「砥苗島は伊豆諸島最大のカムリウミスズメ繁殖地といわれていますが、これまでの調査ではそれだけのコロニーは確認されていません。また、同時期に島で調査しているオーストンウミツバメがカラスに捕食された痕を確認しているの、カムリウミスズメが捕食されていることも十分考えられます」と話す。今後は「静岡県下田沖の神子元島、伊豆諸島八丈小島の小池根の調査も行いたい。研究を目的とする学生・院生にぜひ参加してほしい」と呼びかけている（原さんへの連絡はEmail: oaks@nifty.com）。

「孫太郎」の繁殖する島を探して

三重県支部の武田恵世さんは、2001年から県内の島を回ってカムリウミスズメの繁殖事例を調べている。「三重県ではカムリウミスズメのことを「孫太郎」とも呼び、漁師の方によると「昔は漁で網を上げていた時など孫太郎が船に近づいてきて、かわいいものだった」との話です」。繁殖期

が終わった6～9月、島に上陸して岩の隙間を丹念に調べ、羽毛や卵の殻を探す。今までに調べた島は29、そのうち繁殖を確認した島は2つ。県内最大の繁殖地といわれ国設鳥獣保護区にも指定されている紀伊長島町の耳穴島では、200か所あまりの岩の隙間を見て回ったが繁殖の確認はできなかった。武田さんは繁殖する島に共通する環境として、陸地から約3km以上離れた島で、北向きで45度以下の角度の岩の隙間があることを指摘する。「雨よけや日よけに適した岩の隙間が多い島、ということですね」。

武田さんは釣り人の行動がカムリウミスズメに及ぼす影響を心配している。「まき餌に使う冷凍オキアミを十分に解凍せずにまくと、沈まずに海面近くを漂い、カムリウミスズメの卵やヒナを捕食するカラスなどを誘引する。そうすると魚も釣りにくくなるので、十分に解凍して使ってください」と紀伊長島町の広報紙や釣り専門誌で呼びかけている。

九州各地で調査の輪

宮崎医科大学技官の中村豊さん（宮崎県支部会員）は1989年から宮崎



原徹さんは絶苗島の調査に加え、奥駿河湾海域(静岡県沼津市周辺)でウミスズメ類・トウソクカモメ類の観察を通常で行っている。写真はいずれも2002年7月9日に沼津市内浦湾で確認された繁殖羽から非繁殖羽へ換羽中のカムムリウミスズメ(写真/原徹)

県門川町枇杷島(4頁9頁参照)で、標識調査と目視によるカムムリウミスズメの調査を続けている。また200

2年には、繁殖後の移動先を明らかにするために、環境省の許可を得てカムムリウミスズメを50羽、頭部の白い部分を着色して放鳥した。同支部の5月の支部報で観察情報を募集したが「情報はどこからも得られませんでした。6月に大分県支部と調査した個体のほとんどは既に換羽が始まり、着色部分がゴマ塩状態になっていました。2003年はもっと早い時期に情報収集を行いたいと思います」。普及活動としては門川町教育委員会主催の町民公開講座で、カムムリウミスズメの大切さと保護の現状を話している。「講演では活発な質問や提案があり、数日後には漁師の方が網に掛かって死んだ個体を町教委に届けてくれました」と中村さんは言い、地元での今後の保護活動の高まりに期待している。

大分県支部では2001年より津久見市周辺の海域を中心に、カムムリウミスズメの調査を続けている。当初、県の委託調査として始まったが、予算の都合により委託は1年で中断。しかし「カムムリウミスズメの貴重さ、この地区での繁殖確認の重要性を考えると、会員のボランティア精神を頼みに継続しました」と、同支部研究部の高野橋豊さんは経緯を説明する。2002年6月の洋上調査では成鳥19羽、幼鳥7羽を数えた。同支部研究部では、

観察したヒナの体も小さいことからこの海域で繁殖している可能性を考えている。

北九州市立自然史・歴史博物館の武石全慈さん(北九州支部会員)と日本鳥類標識協会会員の武下雅文さんは現在、環境省の依頼で福岡県筑前沖ノ島小屋島のカムムリウミスズメの標識調査を続けている。1987年に小屋島ではネズミによる捕食被害があり、福岡県が1度駆除作業を行っている。武石さんは現在の繁殖つがい数を「10つがいくらいではないか」と見ている。

福岡支部では栗原幸則さんを中心に会員有志で「玄界灘海鳥記録簿」を結成、2002年からウミスズメ類やアビ類など外洋性の海鳥の調査を始めた。玄界灘沿岸は多くの海鳥が越冬地や繁殖地として利用しているが、実際にどこで採餌や休息をしているのか、1日の行動範囲はどのくらいなのかという調査は今までなかった。1年目は陸からの観察を2回、海上調査を1回行い、参加希望者も順調に増えている。5か年をめぐりに調査を行い報告する予定。また鹿児島県支部の溝口文男さんは2000年4月、前出の中村豊さんと共にカムムリウミスズメの繁殖が考えられる離島で調査を行ったが、この時点の調査では観察できなかった。

石川や徳島でも

石川支部では過去に県などの依頼で七ツ島のカムムリウミスズメの調査を行ってきた。調査時期の冬は、日本海が荒れて島に渡ることが難しく、1999年に環境省が調査を行った際、支部の会員も参加したのが最後となっている。橋映州支部長は「ネズミによる捕食の害が見られ、ネズミ捕獲の罠を仕掛けてきたが、その結果は確かめられていない」と話す。また、徳島県支部では「過去に牟岐町の海岸でカムムリウミスズメ観察会を行ったが、見るのはなかなか難しい」と研究部の東條秀徳さんは話している。

(取材、まとめ/編集)

参考

- 福岡支部(2002)
- 支部報「野鳥だより・ふくおか」269号、272号、277号
- 大分県支部(2001、2002)
- 支部報「たより」174号、175号
- 「カムムリウミスズメ生息調査報告書(2001年繁殖期)」
- 「2002年度カムムリウミスズメ調査結果」
- 宮崎県支部(2002)
- 支部報「野鳥だより みやざき」171号
- 武田恵世(2002)
- 「カムムリウミスズメ(孫太郎)の繁殖する島の条件は? 大島の自然環境の絶妙なバランス」(紀伊長島町文化財調査委員会「文化財調査報告書 第20号 平成13年度」)

夢はエトピリカのコロニー復活

ここまでご紹介してきたカムルリウミスズメは、日本で繁殖するウミスズメ類の中でも、南に分布している種です。一方、北日本においても、地域のウミスズメ類を守ろうと取り組んでいる方々がいらっしやいます。北海道浜中町でエトピリカの保護活動を行っている片岡義廣さんにご寄稿いただきました。

文 片岡義廣

エトピリカの昔と今

エトピリカは北太平洋の寒冷な地に分布しているウミスズメ科の海鳥。日本では絶滅危惧種になってしまっただけでなく、根室半島の島や岩礁、霧多布周辺、厚岸の大黒島で普通に繁殖していたらしい。この地域はエトピリカの太平洋西側の分布のもっとも南の地域になる。この地域で繁殖するエトピリカの数は



小島の東側斜面に設置したデコイとエトピリカ親子の鳴き声を流す装置 (写真/片岡義廣)

現在、根室のユルリ島・モユルリ島・霧多布を合わせ10数羽がいなくなってしまった。では昔はどれくらいいたのか？これが難しい。わずかに残る資料から想像に想像を重ねて、1000羽以上いたんじゃないの、きっと、つてとこだらうか。それでは霧多布にはどれくらいいたのか。昔から漁をやっていた人は必ず言う、「山いたなあ」。たくさんいたってことだ。当時は最低3か所で繁殖していたのは間違いないように、100羽以上はいたらしい。その霧多布では現在、アゼチ岬沖にある小島と呼ばれる島で、わずか1羽がい繁殖している。

現在やっていること

ここまで来るのにいろいろあった。できたこと、全面協力が得られないこと、など(注1)。

1. 繁殖地の小島の立ち入り禁止を要請(守られている)。
2. 小島周辺の海域の刺し網自粛の要請(協力者もいるが解決には漁業保証が必要)。
3. エトピリカ見物を目的とした船舶の禁止要請(一部非協力者がいる)。
4. 死体や弱った個体の届け出要請(沖合の漁師の方が町の教育委員会に届けてくれるようになった)。
5. 保護された個体のリハビリ。
6. 小島にエトピリカのデコイ設置。
7. 周辺海域にデコイを浮かべる。
8. 小島でエトピリカの声を流す。
9. エトピリカがいる間(4月下旬から8月下旬)の継続的な観察。

結果どうなったのか

やることに意義がある訳ではない。こういった活動には結果こそが重要なのだと思う。その結果は、「うーん」としか言いようがない。以前から繁殖していた1羽がいは95年の繁殖が最後になってしまった。翌年からは若鳥の飛来はあるものの、恐れていた繁殖地の喪失がおこってしまったのだ。若鳥は常に小島に来るわけではなく、何か所もの繁殖地をまわって将来の繁殖場所を探らしい。海上デコイに若鳥が挨拶したり疑似交尾をするのが見られる。確かに仲間と思わせる効果があるのだからと思う。2002年の最大観察数は9羽だけど、一度の平均観察数は2、6羽に過ぎない。あまりにもここに飛来する数が少な過ぎるのだ。ただ一つの良いニュースは99年に初めて若い1羽がい繁殖を始めたことだ。このつがいは今まで毎年繁殖してい



浜中町・霧多布のエトピリカ保護が始まる

エトピリカをなんとかしたい、なんてことは諦めていた。観察を始めた1985年に7つがいたエトピリカが92年には1つがいが繁殖するだけになってしまった。その間、これから繁殖

13 ※片岡さんの取り組みは本会協賛の日米海鳥シンポジウム・ワークショップ(16頁参照)でも紹介されました。 野鳥 2003年2月号 No.661

片岡義廣

かたおか・よしひろ

国設鳥獣保護区管理員。
職業は「民宿えとびりか村
の村長」。著作に「エトピ
リカ」(北海道新聞社)。
本会根室支部会員。
「はっきり言って辛い。望
遠鏡で長時間エトピリカを見続けるのも。高さ
40mの小島をよじ登るのも。もう年だから。おかげ
でシーズンオフになると何もする気がおきず、
毎日ゴロゴロして過ごすことになるのである。と
言いつつ、春になるとソワソワしてしまう」



今後の展望

2002年、エトピリカは環境省の

る唯一のものとなっている。繁殖地として復活したこと、若鳥が毎年飛来していること、これが成果と言えるのか私には判断がつかない。何もしないでいたら、果たしてどうなっていたのだろうか。



海上にも仲間がいるように見せるため、船で沖に出て2体1組のデコイを浮かべる。奥に見えるのが小島(写真/片岡)

北のウミスズメ類を守るために

この他にも、本会や会員の方などが、次のような北のウミスズメ類の保護への取り組みを続けている。

春国岱での取り組み

片岡さんの文にもあるように、環境省は2002年度からエトピリカの保護増殖事業を開始した。事業の検討委員会には本会サンクチュアリ室・春国岱原生野鳥公園レンジャーの篠木秀紀も加わり、現地調査や保護管理のあり方について専門家の一人として関わっている。以前から春国岱のレンジャーは根室半島沿岸のエトピリカ保護に取り組んできた(2001年6月号38頁参照)。

天売島から海鳥保護を発信

北海道天売島在住の自然写真家、寺沢孝毅さん(本会会員)は、20年来、ウミスズメ類を含めた島の海鳥全般の保護に取り組んでいる。ウミガラスやウトウ、ウミスズメの調査のほか、地元、羽幌町が進めるウミガラスの繁殖誘致にもデコイ設置など現場の作業に携わっている。さらに海鳥の現状を伝えるため自然観察施設「海の宇宙館」での環境教育、全国に出かけての講演やスライド上映会を行い、話を聞いた人々が「北海道のはすれの島にさえ環境問題があるのか」と驚き、関心を持つ姿に手応えを感じている。2003年からはケイマフリの調査に着手するという。

知床でのマダラウミスズメ調査

北海道斜里町在住の福田佳弘さん(元本会職員)は、1997年から知床半島のウトロ側(オホーツク海側)で、マダラウミスズメの調査を続けている。海岸での目視による調査とボートでの調査を行っているが「現在までの繁殖例は1例のみ。調査でマダラウミスズメを見ることが自体が困難な状態です」と話す。マダラウミスズメは、普段は海上でくらすしているが、繁殖は内陸の樹上で行う特異な生活史をもつ鳥。レッドリストでは情報不足とされており、「目立たない鳥が知らない間に消えていくことが心配」と保護につながるデータを集めている。今後は北方領土での調査も予定しており、ケイマフリの調査も2002年から進めている。(まとも/編集)

保護増殖事業の対象になった。かと言って問題の解決がトントン拍子に進む訳でもないらしい。ただ個人ではできないことも、国だからできる体制だけはあるのだ。エトピリカ減少の最大原因は漁業の網にかかってしまうことだ。沖合はともかく、小島周辺の刺し網は小規模にしか行われていない。協力をしてくれる漁業者もいるが、すべてを漁業者に犠牲を強いる訳にはいかない。それに替わる漁業振興策があれば考え、というのが浜中町の立場だ。小島に飛来するエトピリカを増やすことも

重要だろう。それにはアメリカでニシツノメドリニシツノメドリの繁殖地を復活させた方法がある。多数いる所からヒナを導出し、飼育後に放鳥させる方法で、それによって飛来数を増やすことができたのだ。日本のような環境の悪いところに呼び寄せることはないのでは、との意見もある。正論だとは思いますが、このまま日本の海鳥が減んでいくのを傍観するようなことは私にはできない。日本で唯一陸からエトピリカを見られる霧多布。エトピリカ保護区としてコロナー復活が私の夢だから。

メッセージ

エトピリカを見てみたいバードウォッチャーは多いでしょう。小島は500mの沖合です。近くから見たり写真を撮りたいと船を考える人もいると思いますが、絶対やめてください。今エトピリカは復活するか絶滅するかの瀬戸際です。そっと見守ってください。(かたおか・よしひろ)

(注1) 浜中町教育委員会の助力のもと、町の広報誌で町民の協力をお願いをかけている。

※エトピリカの飛来時期にはホームページ「えとびりか村から」内の「なまけもの日記」で現況を見ることができます。エトピリカ保護への寄付の説明もあります。http://www.5b.biglobe.ne.jp/~pirika/

海鳥保護へ向けて日米間で協力 「日米海鳥シンポジウム・ワークショップ イン 羽幌」開催!



ワークショップ会場。日米の海鳥研究者、行政の関係者らが一同に集い、海鳥保護について活発に話し合った

2002年10月12、15日、北海道羽幌町において、日米の海鳥研究者が集い、海鳥保護のためのシンポジウムとワークショップ（主催：環境省、共催：米国内務省魚類野生生物局・羽幌町、後援：北海道、協賛：本会及び日本海鳥グループほか）が開かれ、一般の方々を含め計200名以上が参加しました。日米の海鳥保護を包括的に議論する場としては初めてのことで、海鳥の保護を進めていくために活発な議論が行われました。

日本と米国の間には、両国間で渡り鳥及び絶滅が危惧される鳥類を保護する目的で日米渡り鳥等保護条約が締結されており、この条約に基づいて、保護を進めるための会合が定期的に開かれています（注）。今回のシンポジウムとワークショップはこの会合を通じて

開催が決定したもので、日本の海鳥保護を今後どのように進めていくか、それを北太平洋全体の保全にどうつなげるのかを考えるのが目的です（プログラム等を北海道海鳥センターのホームページ内 <http://www.seabird.jp/sympo2002/report.html>）をご覧ください（けます）。

シンポジウムでは、これまで日米間の会合で取り上げられてきた議題の中から、アホウドリの保護、海鳥繁殖地のデータベース共有、日本・米国・ロシア3国間の協力体制などといった話題について、報告が行われました。アホウドリは、日本の鳥島、尖閣諸島のみで繁殖しますが、繁殖後は米国の領海にまで移動することが知られています。そこで、会合に基づき、米国では国内の絶滅危惧種リストにアホウドリが加えられたほか、非繁殖期の生息状況を把握して保護を進めるために、現在、日米共同で衛星追跡による調査が行われています。

また、米国ではロシアと連携して、それぞれ独自に保有していた海鳥コロニー目録を共有し、アラスカ・ベーリング海域の海鳥コロニー目録をすでに構築しており、日本ともデータベースの共有を希望しています。さらに海鳥を含めた北太平洋地域の鳥類保護を進めるための日米間の協力を、例えば研究者間のワーキンググループなどの形で進めようという動きが始まったという報告もありました。

ワークショップでは、「海鳥の調査・モニタリング・情報の共有」「繁殖地の保全・国



ワークショップを終えて。全日程を通じて、北海道海鳥センター友の会ボランティアの方々の惜しみない協力があつた

際的枠組み」「海洋汚染・混獲削減」「環境教育・普及啓発」について、それぞれ日本国内の研究者、NGO、行政の取り組みが紹介され、また米国出席者からこれまでの事例紹介やアドバイスがありました。海鳥保護を進めていくために共通するこれらの課題について、米国と日本の研究者を含めた海鳥関係者が議論を深めたことは、今後の海鳥保護に向けての大きな一歩といえるでしょう。

（加藤和明／本会自然保護室）

注：日米渡り鳥等保護条約に基づく定期会合は、一時期行われていませんでしたが、1999年から再開され、海鳥以外にもハマシギの共同調査などが始まっています。ハマシギについては本誌にも掲載（2001年9・10月号小特集）。

シンポジウム・ワークショップで紹介された日米の事例の一部は、今月号の特集の4～9頁、13～15頁でも取り上げています。